# 瓦谷山（がこくさん）だより

vol.10

発行日　2009年3月吉日
発行人　（宗）真光寺
　　岡本和幸
印　刷　現代社
編　集　（宗）真光寺

問い合わせ先
（宗）真光寺
TEL 0438-75-7414
○お寺HP
http://www.shinko-ji.jp/
○上総自然学校HP
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/
○お寺ブログ【瓦谷山たより】
http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/

## ご挨拶

昨秋よりの不況による雇用不安、あるいは中東での戦争と、暗いニュースが続きます。最近のニュースで一番気になるのは親殺し、子殺しなどの家庭内での殺人事件の急増です。介護疲れや、病苦などのやむにやまれぬ殺人なら、理解することができますが、突然の凶行や、金銭をめぐる怨恨などで家族を殺してしまう事件が目立ちます。家に帰ってくつろぐことを「帰家穏座」といい、仏のさとりの境地にたとえたのも、今は昔の話になってしまいました。家族でさえも利害関係によってのみ、構成されるようになってしまっているのかとも思います。こうした傾向は、私たちの心が短絡的な欲望の達成に偏向してしまい、忍耐や努力、分かち合いや人や生き物との共生の先にある深い喜びへと向かわなくなってしまったゆえかもしれません。利権団体の利害で動く政治家や、国の将来をかえりみず自己保身と既得権益を守ることに腐心する官僚は、まさにこの国の人々の姿を象徴しているように思えます。こうした方向性を改めなければ、その先にあるのは自分の欲望を手っ取りばやく満たすための犯罪の増加であり、ひいては国家の利害を守るための戦争の勃発でしょう。

今こそ人間の生き方に哲学が必要な時です。そしてその哲学により、ゆるぎない自己の完成と社会全体の幸福を模索するべき時ではないでしょうか。人生の目的を欲望の達成におけば、私たちは常に失望を味わうことになります。人間の力には限界がある一方、欲望には際限がないからです。

現実に拡がる一方の格差を憂い、企業は高額な役員報酬を減らして雇用の安定を守るべきだという声や、有り余って捨てられる食物を困っている人たちに届けるフードバンクの試みなども見聞されるようになりました。これこそ仏教が説いてきた社会の形です。すなわち持てる者は持たない者に布施をするというものです。東欧の高負担、高福祉の社会モデルに匹敵する東洋型の環境共生、人類共生の新しいモデルができないものでしょうか。GDPといった経済指標を使わず、国民幸せ指数を国の根幹にすえた、インドとネパールに挟まれた仏教国ブータンの取り組みはとても興味深いものです。

チベットで五体倒地（礼拝）を繰り返し巡礼する老婆が「こんな苦しい巡礼をなぜ行うのですか」という問いに、「世界中の人々の幸せのために」と答えていました。過去は記憶に過ぎず、未来は想像にすぎません。一時を生きる私たちは、心の中心に慈悲を置き、自らを慈しみ、人を慈しみ、すべての生き物を慈しみ、地球を慈しむ、欲望まみれにならない生き方の模索を人生の目的として、この老婆の言葉に学ぶべきではないかと思っています。

合掌

住職　岡本和幸

# 行事報告

［檀信徒］

## ◆修正会◆

修正会のおこりは中国にみられますが、日本では奈良平安時代に行われていた「吉祥天悔過会」が「修正会」の源流であるともいわれています。「悔過」とは、大乗仏教でいう「懺悔」の意味の「過ちを悔いる」ことで、過去の罪業を仏前において悔いることによって「天下泰安」「風雨順時」「五穀成熟」「万民快楽」等を祈願することをいいます。今日では、祈祷般若をつとめて国や社会の安泰、家内安全、厄払いなどの祈願が行われています。そこには、単なる現世利益を念ずるだけでなく、喜びをもって行いを修め、仏の智慧を速やかに頂き、菩提心に怠りがないようにという願いがこめられています。

そして真光寺での修正会ではプラスαの〈笑い〉です。いつもは落語家さんに来ていただいていますが、今回はお笑い芸人さんに来ていただき、新春の笑いの風を送り込んでもらいました。

法要の様子

コラアゲンはいごうまんさん
（ワハハ本舗所属）

笑いの絶えないひとときでした

［縁の会会員］

## ◆七日法要◆

（午前ー法要、午後ー季節の行事）

◇「懺悔会・お餅つき」◇　十二月七日（日）
季節の行事・・・二升（二〇キロ）の餅米を蒸かしてお餅つきを行いました

◇「修正会大般若祈祷法要・年頭法要」◇　一月七日（水）
季節の行事・・・多幸を祈願する大般若祈祷法要を行いました

◇「涅槃会」◇　二月七日（土）
季節の行事・・・七日法要では初めての坐禅を行いました

十二月/法要

十二月/
餅つき

一月/大般若祈祷法要

二月/坐禅

# ◆真光寺の里山再生活動のあらまし◆

千葉県北部は下総台地など関東平野の一部を担い、比較的平坦な地形が広がっていますが、真光寺のある袖ヶ浦市内陸部辺りから南部に向け丘陵地が展開していきます。こういった中山間地域（平地と山間地域の中間）は「里山」として古くから農林業の生産の場として利用されていました。しかし、近年ではまとまった農地が少ないこと、地形からなる作業効率の悪さに加え、集落の高齢化、過疎化が進み、耕作を放棄する農地が多くなっています。

真光寺から更に約2.5km程奥へ進むと、そんな耕作放棄された谷戸がありました。ここの特徴は、新田地区を流れる大月川の源流域であることと、周辺のゴルフ場開発から免れた雨水流域を保っていることです。これは大変希なことだと専門家に教えられたのが再生活動をおこなうきっかけになりました。

先行して平成八年より境内地の竹林整備等をおこなっていましたが、竹林整備が一段落したことと、この話を受けて奥の谷戸へと作業の場を移しました。

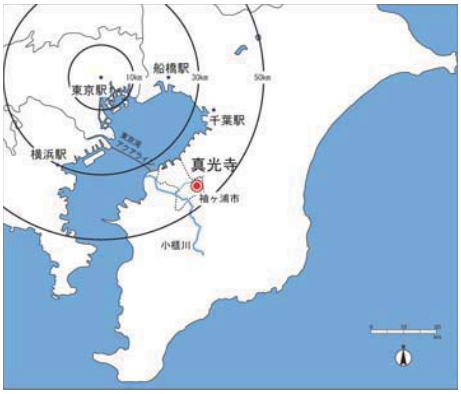
作業を始めた平成十六年の当時は、水田に木は生えているし、草や笹などで先が見えず、谷戸全体を把握することなどとうてい出来ない状況でした。

少しずつ田んぼへと姿を戻していくと色々な発見があります。谷戸の両側の山から絞り出る水は清らかで、夏の日照りが続いても枯れること無く水を供給してくれます。その水路にはサワガニやドジョウ、ヨシノボリなどが生息し、サンショウオの産卵場所にもなっていること、水の水量流速などによってオニヤンマの生育場所が微妙に限定されていること。また、笹を刈り払うことにより、シダ植物、スミレ科の花が咲き始め、カエルの生育場所が出来るとそれを狙うサシバ等の猛禽類が姿を見せ始めました。

水田で稲作をおこなうために水路を整備したり、隣接する山裾（やな）を刈り込んだりすることによって維持される「二次的自然」が里山の自然であって、人間が適度に関与することによって築きあげられる関係性なのだと実感することが出来ました。

しかし、近年おこなわれている多くは効率だけを求め平地へと耕作地を移しています。それにより地形上の制約から生じる多面的機能が失われ、生物多様性を減少させています。この様な状況を打開しようと、千葉県では都道府県レベルでは初めてとなる「里山条例」を平成十五年に施行していますし、国も今まで法の網の外であった農山村における良好な景観形成を図るための「景観緑三法」を平成十七年に施行しました。これらが形となって評価が出るまでにはまだ長い時間が必要です。

私たちのこの活動で掲げる目標は、**「自然に学び、自然を楽しみ、地域の人たちと交流し、人の輪を広げていく」**こと。自然への理解を広げることが地域の保護につながり、人の心の成長を助けると考えるからです。



■真光寺の位置図

■平成13年の航空写真

■平成16年 田んぼに生えた木の伐根

■平成16年 開墾最初の田んぼ

■平成20年（夏） 現在の田んぼ

＊再生活動の最新情報（ブログ）は、
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/から
「瓦谷山だより」をご覧ください。

# ◆里山再生活動◆

昨年から始まった新プログラム
【風景を開きませんか？】

里山の生き物や植物をつぶさに観察し、山に入り笹を刈り開き、間伐した木を材に遊歩道をつくったりしながら、人が入らなくなった山に光りと風の入る空間を広げていきます。そこでは自然から教えてもらうことが夜空の星のように！たくさんあるのです。そして何より自然の中で体を動かすことは楽しい！　そんな冬の里山の様子をご覧下さい。

［ちば里山センター共催　／　独立行政法人環境再生保全機構・地球環境基金助成事業］

## 11月

1. 自然観察・カンアオイを発見
2. 自然観察・カワニナ（ホタルの餌になる貝）の動いた跡

## 12月

1・2. 鍬を手に道づくり
3. 笹一面に覆われていた場所を刈り開く。
奥に見えるは山桜
4. 蔓でカゴ編み。
「一升瓶入れにいいでしょう！?」

## 1月

1. 良く手入れされている人工林を見学
2. チェーンソーを使ってみよう！
3. 間伐した材を横に渡した土留めを固定しながら土を削って道をつくっていきます
4. 道をつくれば会話も弾む！？

---

## ◇活動予定◇

### ［谷津田のお米作り］

**「畔塗り」**
日時　四月十八日（土）／十九日（日）
内容　田の畔塗り

**「田植え」**
日時　五月二十三日（土）／二十四日（日）
内容　田植え

**「草取り・ホタル狩り」☆サマーキャンプ☆**
日時　六月二十七日（土）・二十八日（日）
七月十八日（土）・十九日（日）
内容　田の草取り・夜の田んぼでホタル観察
※六・七月のサマーキャンプのみ宿泊になります

### ［里山の自然観察会］

**「春の里山散策」**
日時　四月二十九日（祝水）
内容　竹の子堀り／春の植物・生き物観察

**「夏の里山体験」**
日時　七月二十五日（土）
内容　夏の植物・生き物観察

集合場所／時間　真光寺／一〇時
＊電車での参加の方には送迎を致します。（要申込み・内房線姉ヶ崎駅改札口午前九時三〇分集合）
お昼　持参でお願いします
（宿泊の場合は初日のお昼のみ持参）
特典　参加回数当たり一キログラムの新米を進呈
締切　各期日の五日前
費用　二千円（保険代含む）
服装　動きやすく、汚れても良い服装
申込み方法　http://www.shinko-ji.jp/satoyama/の「参加受付フォーム」又は　電話・FAXにてお申し込みください。

# 『修証義』に学ぶ

真光寺住職　岡本和幸

今日広く読まれている『修証義』は、皆様にもなじみ深いお経様であろうと思います。この経典は今日曹洞宗の教義の根幹であり、布教教化の柱として輝きを増しています。

実はこの『修証義』というお経は、明治時代になってから編まれたもので、主に道元禅師の『正法眼蔵』の中のさまざまな部分をつなぎ合わせて作られています。今日、檀信徒の皆様から、お経は難しすぎるとか、なぜわかりやすい日本語の教典がないのかという質問を受けることがありますが、実は明治時代にも同様な思いがあり、それに応える形で成立したのが『修証義』です。なぜそのようなお経が生まれたのでしょうか。簡単に『修証義』成立の経緯を辿ってみたいと思います。

明治維新は日本の歴史上の一大転換期であると言えますが、幕藩体制下で安定した檀家制度を確立していた仏教界も明治初期の廃仏毀釈の嵐に翻弄され、疲弊の一途をたどっていました。紆余曲折を経てようやく落ち着きを取り戻すまで、三十年近い月日を要したのです。廃仏という厳しい行動は、時代の潮流というよりも、幕藩体制下で腐敗し、傲慢になっていた僧侶・寺院に対する庶民の反発という側面も否定できません。

そのような状況をまのあたりにして、在家の人々の要請に真摯に応え、教導していく新しい仏教の必要性を感じた多くの先達が力を結集し、明治二十三年に『修正義』がこの世に生まれました。当初「洞上在家修証義」という名前でしたが、その後「曹洞教会修証義」、さらに「修証義」と名前を変えながら少しずつ浸透し、現在に至っています。しかし発刊より一世紀を経て、現代への即応性という点では必ずしも充分とは言えず、またつなぎ合わせのお経であるがゆえの問題点も数多く指摘されているのも事実です。

## ◆修証義の概要

『修証義』の中心思想は「修証不二」といわれています。つまり修行することと、さとり（証）とは別のものではなく、修行した結果がさとりとなるわけではない。それは同時に実現してるという考え方です。『正法眼蔵』の「弁道話」の巻に、

**それ修証はひとつにあらずとおもえる、すなわち外道の見なり。仏法には修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆえに、初心の弁道すなわち本証の全体なり。かるがゆえに、修行の用心をさづくるにも、修のほかに証をまつおもいなかれとおしう、直指の本証なるがゆえなるべし。すでに修の証なれば証にきはなく、証の修なれば修にはじめなし。**

というお示しがあります。つまり修行した結果としてさとりを得るという考え方は、仏教の教えではないというのです。修行とは本来さとりにつき動かされ行うものであるので、たとえ初心の修行でも、その修行はさとりの全体を具現化しているといわれています。仏にしても祖師方にしても、さとる前も後も同じ修行を続けられ、また修行はそのようなさとられた方々の教えのままに行われるわけですから、さとりの働きの中での修であり、修はさとりの全体なのだとお示しなのです。

これを現代にあてはめて考えてみると、「果報は寝て待て」と何の行動も起こさなかった自分が、何かをきっかけに頑張らなければと動き出したとき、すでに頑張って生きているのだといったところです。受験勉強を例にすれば、志望校合格を目指して必死で勉強しますが、実は一生懸命学んでいるその姿にこそ意味があるのであって、振り返ってみれば、合格不合格の結果よりもそのとき学んだことが、実は我が身のためになっていることに気づかされます。合否の結果がすべてというのが世間の法であるのに対し、自分自身の行いがすべてである仏法を端的に教え示している事例と言えるでしょう。

この教えは禅の全体を教えています。禅をしようとするとき、仏祖そのままの行いをしようとしている自分がいるのです。坐っているときは仏祖と同じ形、同じ心なのです。そのあたりを「直指の本証」、つまりさとりのすべてがあらわれていると道元禅師はお示しです。

『修証義』はこの「修証不二」の考え方で貫かれており、これはまさに道元禅師の仏法の根幹でもあります。自分自身がどう生きるのか、自分の行いはどうすべきか、自分が行わずしてなんのための人生か。日々に仏の行いを行じ、仏の作法、智慧にならう生き方を説くのが『修証義』というお経様なのです。

## ◆『修証義』の構成

『修証義』は五章立てになっています。第一章は「総序」で仏道全体について述べている章です。縁起、無我、無常など根本説教にふれ、仏法の正しい理を見定める道として、まず生死の問題を提起し、人生の在る姿を直視して、人間とはいかなるものか、人間の真実を見定めようとしています勧善懲悪の倫理観を説いているように考えられる部分もありますが、この章の底流には、人として有意義な時を過ごしていこうという悲劇があることを念頭におく必要があると思います。

第二章は「懺悔滅罪」という章です。懺悔というと堅苦しい印象を受けますが、私たちは「これではいけない」とか「どうしたらもっとよくなるだろう」などと、反省を抱いたり、向上心を起こしながら日々の生活を送っています。このように自覚的、主体的に自分の人生を問うことこそが懺悔であり、それを積極的にとらえて生きることが菩薩道への第一歩ではないかと考えます。

第三章は「受戒入位」という章です。この章は発願の章といえます。戒とは自らの心をいさめるという意味です。法律や道徳は他からのいさめですから戒ではなく、律というものです。人の心はいつもぐらぐらと安定しないものですから、戒という柱を心の中に立てて支えとするのです。仏様のもとでそのことを誓願するのが受戒です。

第四章は「発願利生」として、具体的な自身の行について書かれています。懺悔し誓願すると、おのずと菩提の心、つまり仏心が生まれ、自らは仏にならずとも、他をして成仏せしめようという大悲弘誓の悲願に生きる心が生まれる。あるいはそのようにつとめる生き方こそが仏の生き方であるといったような内容になっています。

そして最後の第五章「行持報恩」へと続きます。第五章では四章で説かれた行いは何かに強要されて行うといったものではなく、人のはからいを越えた自然の行であるとしています。その自然の行を、この自身の命をいただき、かつ生かしてもらっていることへの報恩行と位置づけた上で、今日という一日を存分に生き抜くよう励ましています。そうした生き方こそが仏の行いであり、さとりに突き動かされた行いであるとして、最後に即心是仏を説き、修証不二の理をもって締めくくっているのです。

## ◆生を明らめ死を明らむる

**生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし、この時はじめて生死を離るる分あり**

これは『修証義』の冒頭の言葉ですが、ここにお経のすべてが象徴されていると思います。生を明らかにするということは、この命とは何ぞや、生きる意味とはなんだろうと考えていく上でなんとか理解できるように思います。しかし、死を明らかにするといわれると、死語の世界を明らかにするのかななどと考えてしまいます。しかし仏教では死語の世界について無記（返答しない）とし、それを考えること自体、意味のないことであるとしています。

私の友人のお父さんが病院の病室で自殺を計ったと聞いて驚いたことがあります。ガンの宣告を受けて闘病生活を送っていたのですが、病状が思わしくなく、死ぬのが怖くて手首を切ってしまったというのです。痛みに耐えられない等の病苦で自殺をするというのなら話は分かりますが、確かに死ぬのが怖くてといわれたそうです。友人は「なんて情けない父親なんだ」と言っていましたが、これが人間の本音であり、人間存在の真実なのではないかなと思いました。

昔、朝日新聞の「時のかたち」というコラムに岸田秀氏が「死の恐怖を知るのは人間だけである」というコラムを書かれていました。

「自分は死ぬと考えただけで、怖い。人間は自我の持ち時間が永遠でないことを恐れるのである。（中略）そこで人間は、神とか国家とか正義とか真理とか家とかの何か永遠的絶対価値を発明し、その価値に身を捧げ、殉じることによって、自我を永遠なるもの、絶対なるものにつなげ、死の恐怖から逃れようとしてきた。しかしそれらの価値が信じられなくなった現代、人間はかつてなかったほどの、死の恐怖に怯えていると思われる。」

人間は時の流れが永遠であることを知ってしまったがゆえに、自我の有限性を恐怖するようになったという指摘はその通りではないかと思います。お釈迦様は時の流れの永遠性を「諸行無常」、命の有限性を「諸法無我」と言われ、深く心に刻むよう説かれていますが、ここに仏教が生死を越え死の恐怖を越えていく理があるのです。

私のお寺の檀家さんが肺ガンになり、治るかどうかという病状でした。この方も「死ぬのが怖くて仕方がない」と言われていました。同時に「ガ

ンになってどうしていいのか分からない。痛いといえば家族が心配するし、家族に当たり散らしたい気分になることもある」とも言われます。

もとより浅学非才の私で、聞くよりほかに慰める手段も持たないのですが、ある日「ガンになる以前は死ぬのが怖くなかったの？」と聞きますと「前から死ぬのは怖かったけど、ガンだって言われると実感がわいて」と言われます。そこでこう言いました。

「仕事をしている時だって大声で叫びたいようなつらい時だってあったけど、家族にいえば心配すると思って黙って我慢してたのでしょ、ガンになっても何一つ変わってないんじゃないの？　明日死ぬかもしれないのは万人平等、五分と五分。ガンの前と何もかも同じように考えたらどうですか」。苦肉の言葉でした。しかしその時「なるほど」と、すっきりとしたお顔で帰っていかれたのです。ガンになってさあどうしようと自我がむくむく頭を持ち上げて、自分の中だけで考えがぐるぐる回っていたのがすっきりとされたのかなと思っています。

### ◆さとりと共に歩む

良寛さんが七十一才の時に大地震に遭われた時、の手紙の抜粋です。

**地震はまことに大変に候、野僧草庵何事もなく親類中死人もなくめでたく候**
**うちつけに死なば死なずてながらえて、かかる憂き目を見るがわびしき**

無事だったことを知らせる一方、長生きをしたからこんな目に遭ってしまったと愚痴っています。この部分は私を中心とした自我があらわれている部分です。そして

**しかし災難に遭うときは災難に遭うがよく候、死ぬる時節には死ぬるがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候。**

と、まるで他人事のように言い放ちます。この部分がさとりの部分あるいは無我の部分ではないかと思うのです。仏であってもさとった人であっても、生ある限りは悲しみや苦しみや恐怖と闘います。しかし良寛さんの言葉のように、さとりと共に、あるいは仏と共に生きることで、同時に苦しみや悲しみを越えることができるのです。

このように考えると、『修証義』の冒頭の生を明らかにするとは、自我を明らかにしていくことと考えられます。また、死を明らかにしていくとは、無我を明らかにすることではないかと思うのです。『修証義』の最後は「即心是仏（そくしんぜぶつ）」という言葉で締めくくられています。良寛さんのいうように、悩みながら苦しみながらも、常にさとりと共に、仏と共に歩んでいくことで、この身このまま凡夫（ぼんぶ）のままで、仏となる生き方が実現していく。これが「即心是仏」ということではないでしょうか。興味深いことに、『修証義』の初めと終わりの言葉の中に全体を貫いている思想が見えているわけです。

---

## 日常の中の仏教

寺務局編

二人で何かひとつのことをする時、息がピッタリと合うことを「阿吽(あうん)の呼吸」と表現します。広辞苑によると「共に一つの事をする時などの相互の微妙な調子や気持。特に、それが一致すること」とありますが、この「あうん」の由来はどこにあるのでしょうか？

時代は紀元前五世紀頃、インド亜大陸や東南アジアにおいて公用語として用いられていたサンスクリット語の字母(アルファベット)にこの「あうん」があります。字母の最初の音である「a」と最後の音である「hum」に漢字を当てたもので、口を開いて出す音と閉じて出す音の組み合わせにより、呼気と吸気という意味も持っています。日本語の字母である五十音もこのサンスクリット語の字母の影響を強く受けているとか。密教ではそれぞれ宇宙の始まりと終わりを表す言葉とされ、この世の一切合切を意味する言葉として用いられています。寺院の山門の左右にある仁王像や狛犬も一方が口を開き（阿形）、一方は閉じています（吽形）。転じて、二人の人物が呼吸まで合わせるように共に何かを行っている様子を阿吽の呼吸、阿吽の仲などと呼ぶようになったのです。

# 行事予定

## ［檀信徒］

### ◇春季彼岸会法要

平成二十一年三月二十二日（日）午後二時より

彼岸とは、迷いの世界（此岸）から悟りの世界（彼岸）へ至る教えで、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の６つの教え（六波羅蜜）を実行し仏道精進する期間とされています。ご参詣をお待ちいたします。法要後は落語を予定しています。

### ◇花祭り法要・檀信徒総会

平成二十一年五月十日（日）午前十一時より（台所当番・根澄山）

お釈迦様のご誕生、花祭りを祝い又、檀信徒総会を開催致します。終わって親睦会を開催致します。川原井地区の檀信徒の皆様は送迎致します。役員が出欠を取りますのでお申し込み下さい。また近在の皆様もお申し込みいただければ送迎いたします。電話にてお申し込み下さい。

### ◇婦人会ご詠歌練習日

三月　十日(火)・二十四日(火)　四月十四日(火)・二十八日(火)
五月十二日(火)・十九日(火)　六月　二日(火)・二十三日(火)
七月　七日(火)・二十八日(火)

※各回午後七時半より、五月から午後八時より真光寺にて行います。
（どなたでも飛び込みで参加できます）

### ◇お寺掃除

七月　五日（日）台・新田地区
八月　二日（日）表場・上・下根澄山地区

## ［縁の会会員］

### ◇七日法要　季節の行事予定

四月「花祭り法要」　平成二十一年四月五日（日）
【午前】授戒式・月供養　【午後】植樹祭

五月「田植え祭」　平成二十一年五月七日（木）
【午前】授戒式・月供養　【午後】坐禅又は里山散策

六月「中元祭」　平成二十一年六月六日（土）
【午前】授戒式・月供養　【午後】写経又は里山散策

七月「施食会」　平成二十一年七月四日（土）
【午前】授戒式・月供養　【午後】大施食法要・新盆施食法要

八月「盂蘭盆会」　平成二十一年八月七日（金）
【午前】授戒式・月供養　【午後】大施食法要・新盆施食法要

**＊昼食準備の都合上、ご出席いただく場合は必ずお電話等でご予約ください**
**午前のみ・午後のみのご参加もできます。**

＊電車での参加の方には送迎を致します。
内房線姉ヶ崎駅改札口　午前一〇時集合（要申込み）

### ◇寺のある暮らし

平成二十一年五月二日（土）・三日（日）

寺のある暮らし一泊坐禅会を開催致します。
山歩きや里山散策、坐禅や写経など色々なメニューを自由に選んで、のんびりとした一日を体験して下さい。

集合場所・時間　真光寺十一時

＊電車での参加の方には送迎を致します。
内房線姉ヶ崎駅改札口　午前一〇時三十分集合
（要申込み）
参加費　六千円（一泊二日）

**各種お申込み連絡先**

TEL 0438-75-7414（代表）
TEL 0438-75-7365（縁の会事務局）
FAX 0438-75-7630
e-mail ennokai@shinko-ji.jp